



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2010-18

詩歌と中日戦争
西南大後方の抗戦詩歌を中心に

史 桂 芳（坂井田夕起子訳）

詩歌と中日戦争*
西南大後方の抗戦詩歌を中心に

2010年12月5日

史桂芳[†] (坂井田夕起子[‡] 訳)

* 本稿は、2010年11月27日、大阪大学で開催した中国現代史研究会月例会における報告原稿を改訂したものである。

[†] 大阪大学・法学研究科・外国人招へい研究員 (中国首都師範大学・歴史学院・教授)
(shigf525@126.com)

[‡] 大阪大学・法学研究科・特任研究員 (ysakaida@law.osaka-u.ac.jp)

中日全面戦争勃発後、多くの知識人が重慶、昆明、桂林等西南大後方に移り住み、時代感覚に富んだ詩歌を創作した。詩歌は抗戦文学の庭における一輪の奇花であり、中国近代文学史上の重要な一頁であるにとどまらず、中日戦争研究の重要な内容でもある。本文は中日戦争時期の西南大後方の詩歌を考察対象とし、西南大後方の詩歌の形成、内容、特徴と作用を中心に分析し、新たな角度から中日戦争を理解するものである。

日中全面戦争勃発後、中国の多くの工商業、科学技術界、文芸界のエリートたちは国民政府の遷都に従って大後方へ移動した。もとより「以天下为己任」とする知識人たちは、時代性のある詩歌を大量に創作した。本文は西南大後方の詩歌を中心に、大後方の詩歌の形成、内容、特徴を分析し、新たな角度から抗日戦争の「全民性」について読み解く。

・大後方詩歌の興隆

中国にはもともと「詩言志」の伝統があり、最も早い詩歌総集『詩経』の中にも民衆の苦労や社会の暗部を批判した内容の詩歌が多い。2000余年の歴史発展の過程で、詩歌は終始現実批判を含み、民族の興亡といった政治的情緒に関心をはらってきた。

中日戦争時期、詩人は「心憂天下」「敢為人先」の精神によって、多くの人口に膾炙する詩歌を創作し、これまでのどの時代の詩歌よりも政治に関心を持った。

盧溝橋事変後、国民政府は持久消耗戦略を制定し、中国沿海地区の工場、高等学校、文化組織は西部地区に移動した。郭沫若、茅盾、柳亜子、巴金、老舍、夏衍、胡風、艾青、臧克家ら多くの文化著名人が重慶、昆明、桂林などの西南大後方にやってきた。かつて平穏で、遅れていた西南地区は、一度に人材が集中し、中国政治文化の中心となった。1938年4月、国民政府軍事委員会政治部は第三庁を成立させ、抗戦宣伝工作を専門に担当させた。1940年11月、第三庁は文化工作委員会に改組された。第三庁の指導下で、西南大後方の文学は反映の様相を呈した。1938年3月、中華全国文芸界抗敵協会が成立し、各地で抗敵協会分会が続々組織され、西南大後方の詩歌の発展に良好な条件を提供した。

詩歌とその他の文学形式を比べると、詩歌には言葉がよく練られ、朗々として口調がよく、容易に伝えられやすいなどの特徴がある。「国破山河在」の厳しい情勢は、さらに詩人の激情と創作意欲をかきたてた。黄炎培は言う。「厳しい処世の道を行き、国家が危機的状况にあり、わが身の悲哀が深まり激しくなるほど、情感はあふれ、それを吐き出す場がなく、すべてを詩の中に書き入れた」[黄炎培 1987: 5]

西南大後方の詩歌の作者は大学教授、学生、職業文人ら知識人のほか、政界の名士、軍隊の将

官、社会活動家などの著名な人々であった。当然、詩歌創作の主力は知識人である。知識人は詩のクラブを組織し、刊行物を発行し、研究討論会を組織するなどの多彩な形式によって、交流を行い、詩歌創作の水準を不断に高めていった。

1930年代末から1940年代初めにかけて、西南大後方には影響力の大きな詩歌団体が存在した。中国詩人協会、時調社、詩時代社、中国詩壇社などである。出版された主な雑誌は『開拓者』、『時調』、『五月』、『新時代』、『中国詩壇』、『詩文学』、『頂点』、『詩創作』、『戦歌』などがある。また『大公報』、『救亡日報』、『吶喊』、『七月』、『新華時報』、『雲南日報』、『新蜀報』などの新聞も詩歌専門欄を開始し、詩歌、詩の理論、詩の批評に専門の紙面を提供した。

1938年8月20日、救亡詩歌社編集で文協雲南分会が出版した詩歌月刊『戦歌』は昆明で創刊され、重慶、成都、桂林、延安、昆明などの詩歌作者の支持と歓迎により、多くの詩歌や詩の批評および翻訳作品を発表した。茅盾は『戦歌』が西南の「詩星」であると賛美した〔蘇光文 1985：42〕

西南の大後方で出版された大量の抗戦詩集には、郭沫若の『戦声集』、『蝸蟻集』、馮雪峰の『靈山歌』、馮至の『十四行集』、艾青の『雪落在中国的土地上』、『北方』、『向太陽』、『他死在第二次』、『吹号者』、『火把』、臧克家の『従軍行』、『泥淖集』、『嗚咽雲煙』などがある。愛国將軍馮玉祥も『抗戦詩歌集』（1938年3月、三戸図書印刷社出版）を出版し、詩集は1939年と1941年の2回再版された。

大後方の詩歌の多くは新体詩であり、内容もはやくから花鳥風月、個人の喜怒哀楽を超越し、「五四」以来の新詩運動の発展を推し進め、詩歌と現実政治の結合を促した。

戦時首都重慶では、詩人文化団体は常に詩歌座談会、詩歌晩会を組織し、詩歌研究討論会を発展させた。新詩運動の発展によって、詩晩会、詩の朗唱、詩の壁新聞、街頭に貼りだす詩などの形式の提唱によって、新詩運動と書籍の印刷以外にさらに多くの新しい詩の伝達と広報の方法が増え、同時に、新聞雑誌詩人と読者たちの間の交流が生まれ〔龍泉明 1989：421〕、詩歌と読者の関係が密接になった。西南大後方の詩歌は国民政府の内陸部遷都によって次第に発展していったのである。

・大後方の詩歌の内容分析

西南大後方の抗戦詩歌の数量は膨大であり、形式も多様で、内容も豊富だが、華麗な修辭もなく、また工夫された技巧もなく、それがかえって詩歌の文化的効果を極限まで発揮した。西南大後方の抗戦詩歌は、内容は主にいくつかの種類に集中している。

まず、日本軍に侵略を暴露し、人民に故郷の防衛と民族の自由尊厳を呼び掛ける抗戦詩歌がある。中日戦争は「東方の歴史上空前のものであり、世界史上でも偉大な、全世界人民が注目する戦争である。この身に戦争の苦難を受け、自分たち民族の生存のためにすべての中国人が奮闘し、戦争の勝利を渴望しない日はない」[毛沢東 1991：439]。詩歌は戦争が中華民族にもたらした深い災難と提示し、羅烽は「垣曲街景」の中で、街道、破壊された屋根や城壁、ドアのカギ、垣根、庭のカラスなどを通して、日本軍による流血後の凄惨な情景を再現し、詩歌特有の言語によって日本軍の暴行を訴えた [張憲文ほか主編 2005：19]

垂死的街道上
残留着敌人的铁蹄
破瓦颓垣间
呈露着被难者的血迹
门上挂着锁
院墙缺少半边
老鸦在空院子里
窃食几粒劫后的米
呵，从死亡中逃出的人们
来去都是匆匆的

羅鉄鷹は「劫後的古城」の中で「民族の恨みを洗い流すため、ライフル銃を背負い、我々は風砂の草原を奔走し、残虐な敵を迎え撃つ」(为洗滌種族的仇恨，背起來福槍，我們奔走在風沙的莽原，迎擊殘暴的敵人)と歌い、敵の残虐行為によって古城が破壊され、その人民が殺戮にあっていくことを、詩人は大声で叫んだ。そして中国人はこの悲しみに追い込まれるのではなく、武器を手に取り、敵の作り出す残虐さと悲劇の敵を消滅させねばならないと言った [張憲文ほか主編 2005：17]

古城的街
没有一星灯火
没有一响最微弱的声音
除了马蹄
踏在这荒凉的街路上
街路回答的
这似嚎啕的凄音
这声音
也许是
它向我们诉说
它旷古未有的
悲惨的遭遇
从小踏在它身上的

谁被轮奸而死
谁被活剥了皮
谁被挖去了心

戴望舒は「我用残损的手掌」において故郷や祖国の山河への愛情を表現した [張憲文ほか主編
2005 : 26]

我用残损的手掌，
摸索这广大的土地，
这一角已变成灰烬，
那一角只是血和泥；
这一片湖该是我的家乡。

また于右任も「帰里省鬪口巷老屋」の中で，故郷への愛情と日本軍が踏みつけた中国の山河に
対する怒りを表現した [張憲文ほか主編 2005 : 145]

堂前枯槐更着花，
堂后风静树阴斜。
三间老屋今犹昔，
愧对流亡说毁家。

聞一多が「時代の旗手」と称賛した田間は「給戦闘者」の中で，大声で呼びかけ，悪夢は眠っ
ていた中国人を呼び起こし，中国は「復活の歌」を高らかに歌い，人民は胸を張り，武器を持って
徹底的に戦わねばならないと歌った [田間 1990 : 121]

亲爱的人民！
人民，在卢沟桥……在丰台
……在这悲剧的种族生活着的南方与北方的地带里
被日本帝国主义者底枪杀
斥醒了……

詩人は簡略で短く，力のこもった詩句を用いて，抵抗の嵐がどのように血泪の中から巻き起こ
るのかを表現した。

「假使我們不去打仗」は広く流布した詩である [田間 1990 : 135] 詩人は中国人がもしなされ
るがままなら奴隷となるしかなく，敵に輕蔑・侮辱されるといった。そして詩人は中国人がもし
抵抗しなければ殺戮され，踏みつけられるままとなるという憂国を生き生きと紙上で思い起こさ
せた。詩人たちは大声で呼びかけた。「私たちに戦闘者の歩調に合わせて賛美させ，英雄たちの叫
びを迎えさせて欲しい」 [吳奔星 1988 : 316]

假使我們不去打仗，
敌人用刺刀杀死了我们，

还要用手指着我们骨头说：
“看，这是奴隶！”

西南大後方にはさらに一種の新たな詩歌の形式が出現した。すなわち詩歌唱和形式である。郭沫若が編集した歴史劇「屈原」は重慶で上演され、劇中の「雷電頌」は散文詩の形式であり、作者の洞庭湖、長江、東海をしのぶ様子を表現し、「東君」「完全是一片假」を痛烈に批判した。黄炎培は唱和詩を発表し、その後 34 人と詩歌のやり取りをし、詩人の侵略戦争に対する憤怒を表現した。

その次の抗戦詩歌の種類は、祖国を守る前線の兵士を歌い、中国の滅亡を信じず、民衆の勝利を信じる心を鼓舞するものであった。中日戦争時期、詩歌は文人が書齋で歌うものではなく、婉曲や悲哀の情緒は少なくなり、激情的で奮い立つリズムカルなものが増加した。中国詩歌の発展から見れば、どの国家や民族が存亡の危機に面した時にも詩歌の現実に対する関心はとても強烈なものがあつた。中日戦争時期には、中国の各階級、党派がこれまでのしこりを捨て、「兄弟が塹の外の侮辱と戦う」精神で全民族抗戦を実現した。「文学の最大の使命は各方面からこの抗戦を鼓舞することであり、民衆を影響・教育し、この精神的な戦争に参加させ、文学と民族の自衛戦争を密接に結び付ける目的に到達しなければならない」[周揚 1984：237]、「現在、時代の嵐がやってきて、詩壇の暴風雨もやってきた。いわゆる豪華で豊かな生活を捨てて質素に生活するというのは、まことに痛快である」[茅盾 1989]

1938 年 12 月 25 日、『広西日報』副刊の『南方』は「反轟詩歌専号」を出版した。艾青は「発刊辞」の中で以下のように言った。「侵略の悪魔の我が国土での罪状を暴露することは、我らの戦う情熱・剛毅・勇敢さを高め、祖国の勝利と栄光を争う！」[艾青 1991：11]、『南方』副刊は抗戦によって生まれた、抗戦を歌うものである。1942 年 6 月 3 日『華西日報』は勃朗寧が署名した詩「不准它們過來：向横断山脈」を発表し [勃朗寧 1942]、詩人が戦争の悲惨さや兵士の頑強さを人々に提示し、徹底抗戦と領土主権の防衛を呼びかけ、中国を世界の国に並び立たせるよう訴えた。詩人は「この民族解放戦争に向きあい、勇敢に祖国のために戦う戦士や民衆に向きあい、旧時代の闇と新世界の黎明に向き合ったとき、我々の詩人たちは、土地の深い愛に対して、英雄的な兵士の崇高な敬慕について、火の中や血の中で呻き泣く無数の同法への同情と哀悼に対して、ファシスの強盗と野蛮への恨みに対して……我々の詩歌は歌うだろう」[力揚 1939]

在播音机的后面
四万万五千万张嘴大张着
向你们
望横断山脉的

英勇的部队
呼出了
决战的口号
‘不准它们过来!’
‘不准它们过来呀!’
千万只眼睛
从望远镜的镜片里
贪婪地望着你们
防卫保山—祖国的睫
昆明
南中国的眼睛。
弟兄们
这一次战斗
要决定
世界上
还有没有
中国。
中国
把命运
交给你们
‘不准它们过来!’
‘不准它们过来呀!’

詩人はまた自覚的に中国人民の抵抗と世界人民の反ファシズム戦争を結びつけ、「消滅ナチス党徒」(消灭纳粹党徒) の中で、詩人は中国人が武器を強く握れば、侵略者は必ず「完全に消滅させることができる」と信じていた。そして、国のために自らをなげうった烈士は後に続く人を鼓舞し、生命をもって国家の安全を守ると信じていた [重慶出版社 1989 : 618-621]

我们的枪
更紧地
在纳粹日本的
咽喉上
幌上来/幌下去
……让/拳头
排着
拳头
让
喊声
连着
喊声
向纳粹党徒冲过去
就在冬季

要他们完全被消灭

巴金は「給死者」の詩の中で、中国人は無抵抗に殺戮されることはなく、死者の敵を討ち、自由を犠牲にし、生命をもって尊厳を勝ち取ると大声で叫んだ [張憲文ほか主編 2005：191]

我们不再把眼泪和叹息带到你们的墓前，
我们要用血和肉来响应你们的呐喊，
你们勇敢的战死，静静地安息罢，
等我们最后一滴血洒在中国的平原。

重慶など大後方では常に日本軍の飛行機による爆撃に遭遇し、防空壕が人々の生命を保存する避難場所だった。詩人たちの眼力は敏感に防空壕の生命力の頑強さや、母たちが子供を養育し、両手で明日の希望を託すことを捉えた。詩人たちは母親を賞賛することを通して中国が滅びないこと、中国に大きな希望があることを歌った。巖辰は「偉大的慈心：給防空洞里的母親们」において特別な視点から、防空壕に避難した母親たちが心を尽くして赤ん坊を育てる様子を描写し、自ら夜を耐え、たとえ背中と手と足が断ち切られても、一分たりとも子供を放棄せず、弱い子供を守る責任を果たすことは尊敬に値する！と歌った。 [張憲文ほか主編 2005：95-96]

你们是最渺小的，
因为没有人注意你们
没有人知道你们的姓名
可是，你们不求
别人的感激和慰藉
只是抚养而且保卫着
将永远抚养而且保卫着
我们民族的后一代的子孙
你们，年轻的母亲们呵
又有谁能比得上你们伟大的慈心

詩人は防空壕の母親たちを歌うことを通して、中国が滅亡しないという心の声を吐露したのである。

さらに、「金のある者は金を出し、力のある者は力を出す」ことによって、最後の勝利を奪うことを呼びかけた。西南大後方では老若男女がみな抗戦に対して尽力し、平日に少ない社会活動に参加する婦女を組織し、兵士の慰問や募金、兵士の救済、救護などの活動を行ない、彼女たちもともと男性がやる耕作などの労働を担った。郭沫若は「中国婦女抗敵歌」の中で、女性が前線を支援することを呼びかけ、一本の針と一本の糸でも抗戦に尽力することであり、兵士を最後の一日の勇敢な闘争に赴かせると言った [張憲文ほか主編 2005：45]

上前线，
上前线，
带着我们的针，
带着我们的线，
为前敌将士，
缝衣千万件。
使他们无劳后顾，
把战壕化成乐园。
站起来，
站起来，
战到最后的一天，
守到最后的一天！

老舍は「丈夫去当兵」の中で、通俗的なわかりやすい形式で民衆の素朴な感情を表現した [張憲文ほか主編 2005 : 103]

男儿本该为国死，
莫念妻子小娇身！
丈夫去打仗，
女子守家庭；
你在外边打得好，
我在家中把地来耕。

著名な国民党の将軍白崇禧は「好男要当兵」の詩の中で、兵隊になり「銃を持って行って横暴に打ち勝つ」のが良い男であり、男は兵隊になって「国の仇に報いる」べきであると歌った。

「抗敵募捐歌」,「献金」などの詩歌は、人民に金のあるもの金を出し、体力のあるものは労働を提供すれば、それらの一滴ややがて大河になると歌った。曉鶯は「恋」の中で、ある青年が恋人と別れ、抗日戦争の戦場に身を投じた壮挙を描いた。于右任は 1941 年 5 月、重慶文化界の第一回詩人節晩会において即席で「詩人節」の詩を読み、国恥を忘れず、命をかけて国に報いることを奨励した [張憲文ほか主編 2005 : 145]

民族詩人节，
詩人更不忘。
乃知崇纪念，
用以懷危亡。
宗国千年痛，
幽兰万古香。
于今期作者，
无畏吐光芒。

抗戦時期の西南大後方は「五四」以来新詩創作が最も盛んな段階を迎え、詩人たちが様々な方

法によって詩歌の影響力を拡大し、抗戦詩歌を民衆によって民衆を動員した。

・ 詩歌から見る抗戦の「全民性」

嵐の中から生まれた抗戦詩歌は、その独特な内容といきいきした形式によって民族精神を励まし、士気を鼓舞し、勝利を確信させる面において未曾有の働きをした。西南大後方の詩歌を通じ、抗戦の全民性の一端を明らかにすることができる。

抗戦時期西南大後方の詩歌は明らかな時代性を備えていた。大後方の詩歌創作者は党派、政治派閥を超え、中国人の意志や要求全体を反映していた。「文芸部門から言えば、詩歌は広大な民衆に最も深く入り込んだのである。この文芸の武器はすでにその威力を発揮し始めており、必ず前に向かって猛進するだろう」[茅盾 1989]「戦争が本当にやってきた。すなわち、人民の忍耐において、詩人の祈りの中で鎖を断ち切る日が本当にやってきた。この時、同時に湧き上がるのは創作上の苦痛な沈思である。如何にして我々の願いを、真の中国人民の願いの代表とするのか。」「戦闘においては、勝利か死か……」[田間 1990：131]

中日戦争時期は詩歌大衆化の急速な発展時期であり、詩人は積極的に民衆を動員し、民心を鼓舞する方面で作用を発揮し、側面から抗戦の全民性を反映した。「抗戦勝利の重要な鍵は、すでに発動している抗戦を全面的な全民族の抗戦へと発展させ、そうすることで最後の勝利することができる」[毛沢東 1991：514]。大衆を動員するには多種多様な形式が必要であり、詩人は詩歌の通俗化、大衆化において努力し、一般大衆に理解させた。近代中国は経済的社会的に遅れており、文化程度も低く、一字も読めない者も多かった。そして西南大後方はかつて中国の経済文化の遅れた地域の一つであり、非識字者の割合が最も高かった。文化人たちが西南大後方にやってきたことにより、西南地区の教育も発展した。しかし、一般の民衆に詩歌の内容を理解させるのは依然としてかなり困難であり、内容から形式まで詩歌は大きな変革をする必要があった。

詩人は通俗的な言語やいきいきした表現方法を自覚することによって抗戦詩歌の独特な魅力を示した。中華全国文芸界抗敵協会の各分会は、街頭詩を執筆し、大幅な壁の詩報を編集出版し、詩歌講座や詩の朗唱晩会を開催することを通して、詩歌をさらに通俗的でいきいきとさせ、一般の人々が語り伝えやすいようにした。

当時はまた壁の詩報など新しい詩歌の形式が出現し、詩歌を鼓舞し、激励する作用を発揮した。詩歌は大衆化の歩みを過去のいかなる時期をも凌駕したのである。

文化は民族意識と民族精神を最も本質的な内容とし、詩人は民族文化の伝承者であり、大量の現実を反映した朗唱詩、叙事詩、風刺詩を創作し、詩歌の形式から内容まで創造的で発展的な革

新と発展を促した。上述のように、朗唱詩は中国現代詩歌が「五四」文学革命の後を継ぐ詩歌形式の大解放であった。「そのとき、極端な場合は一首の詩で朗唱会を組織した。1939年1月15日、大公報社は高蘭の詩「我的家在黑竜江」によって朗唱会を開催した」[高蘭 1987: 322]。臧克家の「詩歌朗唱運動展開在前方」は朗唱詩の作用に対し高い評価を与え、あわせてこの形式がさらに発展することを期待した。朗唱詩の後に出現したのは叙事詩であるが、叙事詩の影響も大きい。例えば艾青の「向太陽」、「火把」、臧克家の「感情的野馬」、「古樹的花朵」、老舍の「劍北篇」は、多くの側面から抗戦の情景を反映し、詩歌と抗戦の結合を実現した。

「新詩運動の発展によって、詩晩会、詩の朗唱、詩の壁新聞、街頭詩などの形式の提唱が行われ、詩は新聞雑誌や書籍の印刷されたもの意外にさらに多くの新しい伝達の方法を増やし、同時に詩人たちと読者大衆の間の接触を増やした。」詩人たちは高慢と自制を取り払い、詩歌の創造と现实生活を結合することを自覚した。田間の「自由、向我们来了」、艾青の「我愛這土地」などどれも詩人の責任感と使命感を反映している。

大後方は多様な人々があり、国民党の高官は国難に財を得て、「前線は緊張し、後方は食べ物に困る」状態となっていた。詩人はこれらの暗部や旧弊に対して、強烈な責任感を感じ、社会の暗部と腐敗を暴露した。1940年代、西南大後方には風刺詩が出現し始め、「風刺詩が多くなった。これは詩人たちが突然喜んだからではなく、実際に触れた事実があまりにも多かつたため、詩人たちは風刺し始めたのだ」[呉嘉編 1985: 49]。例えば「馬凡陀的山歌」、「警察巡查到府上」、「癸票貼在印花上」などの風刺詩がそうである。これにより、国民党はさらに文化芸術の「指導」を重視し、国民党は中央文化運動委員会を成立させ、明確に「六不」「五要」を提示し、文学工作者に「社会の暗部を専門に書くな」と要求し、国民党統治の暗部と腐敗を暴露する作品に制限を加え、風刺詩の創作は影響を受けた。

つまり、西南大後方の抗戦詩歌は、中国近代文学史上特筆されるだけでなく、中日戦争史においても非常に重要な内容である。抗戦詩歌はひとつの側面として抗戦の全面性、全民性を反映している。抗日戦争史と中日関係史の研究が不断に深化している今日において、文化や文学と中日戦争の関係にはさらに注目される、広汎な視野から研究が強化されるべきである。

文 献

- 艾青(1991)『『南方』発刊辞』『艾青全集・第5巻』花山文艺出版社。
勃朗寧(1942)「不准它們過來：向橫斷山脉」『華西日報』1942年6月3日。
重慶出版社(1989)「消滅納粹黨徒」『中国抗日戦争時期大後方文学書系・詩歌』。
高蘭(1987)『『高蘭朗誦詩選』序言』、高蘭編『詩的朗誦与朗誦的詩』山東大学出版社。

黃炎培（1987）「苞桑集序」『黃炎培詩集』中國文史出版社。
力揚（1939）「抗戰以來的詩歌」『廣西日報』1939年1月3日。
龍泉明（1989）『國統區抗戰文學研究叢書·詩歌研究史料選』四川教育出版社。
茅盾（1989）「這時代的詩歌」，龍泉明編『詩歌研究史料選』四川教育出版社。
毛澤東（1991）『毛澤東選集·第2卷』人民出版社。
蘇光文（1985）『抗戰文學紀程』西南師範大學出版社。
田間（1990）『中國新文學大系·詩卷（1937-1949）』上海文藝出版社。
吳嘉編（1985）『克家論詩』文化藝術出版社。
吳奔星（1988）『中國現代詩人論』陝西人民出版社。
張憲文·李良志主編（2005）『抗戰詩歌』河南大學出版社。
周揚（1984）『周揚文集·第1卷』人民文學出版社。

诗歌与中日战争：以西南大后方抗战诗歌为中心

史桂芳（坂井田夕起子译）

Poetry and China-Japan War: Focusing on the Poetry of Anti-Japanese War in the Southwest Area

SHI Guifang (trans. SAKAIDA Yukiko)

Abstract

After the Anti-Japanese War comprehensive outbreak, many intellectuals migrated to southwest areas such as Chongqing, Kunming and Guilin. Responsible intellectuals wrote a lot of poems with sense of the times. Poetry was a miracle in war-resistance literature which not only played an important role in history of modern Chinese literature, but also was important element constituted the research of China-Japan war. This article regarded the southwest poetry as the subject during the Anti-Japanese War, selective analysed the formation, contents, characteristics and effect of the poetry and acquainted the War from a new perspective.

A large number of elites in industrial and commercial circles, scientific and technological circles, literary and artistic circles migrated to rear area followed Nanjing Nationalist Government. Responsible intellectuals wrote a lot of poems with sense of the times. This article centered on the poetry in southwest area, analysed the formation, contents and characteristics of the poetry in rear area, and acquainted universality of the Anti-Japanese War from a new perspective.

（担当委员：田中 仁）

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>